

[論 文]

**児童養護施設における施設実習を  
効果的に行うための保育実習指導  
～施設実習担当職員の施設保育士や  
施設実習に対する認識に着目して～**

時 本 英 知・日 野 さくら・竹之下 典 祥・瀬 尾 知 子  
利根川 智 子・石 森 真由子・細 川 梢・三 浦 主 博  
大 迫 章 史・福 田 真 一

# 児童養護施設における施設実習を 効果的に行うための保育実習指導

～施設実習担当職員の施設保育士や施設実習に対する認識に着目して～

時本 英知<sup>1)</sup> 日野 さくら<sup>2)</sup> 竹之下 典祥<sup>3)</sup> 瀬尾 知子<sup>4)</sup>  
利根川 智子<sup>2)</sup> 石森 真由子<sup>5)</sup> 細川 梢<sup>6)</sup> 三浦 主博<sup>7)</sup>  
大迫 章史<sup>8)</sup> 福田 真一<sup>9)</sup>

1) 青森中央短期大学 2) 東北福祉大学 3) 盛岡大学 4) 秋田大学  
5) 聖和学園短期大学 6) 郡山健康科学専門学校 7) 東北生活文化大学短期大学部  
8) 東北学院大学 9) 東北文教大学

## 要 旨

本研究の目的は児童養護施設における施設実習担当職員が考える“施設保育士に求められること”“実習生に求めること”“指導で意識していること”“養成校に求めること”に関する認識を明らかにし、施設実習を効果的に行うための保育実習指導のあり方について考察することである。そのため施設実習を担当する児童養護施設の職員に対するインタビュー調査を行い、SCATによる分析を行った。その結果、保育実習指導において①子どものモデルとなるために生活力を高める重要性を伝えながら指導すること②実習生が立場の異なる者とコミュニケーションをとり、その内容から行動の読み取りや返答を検討し、フィードバックしながら指導すること③実習施設と協力しながら施設実習の意義や目的を明確にして指導することが重要であると示唆された。

キーワード：施設実習、児童養護施設、保育実習指導、SCAT

## I 背景と目的

全国保育士養成協議会東北ブロックでは、保育実習指導の方法や内容を整理しその望ましい

あり方を提案するとともに、経験の少ない教員が保育実習指導を行う際の一助とする意図も含め「保育実習指導のガイドライン」を作成した。この「保育実習指導のガイドライン」（以下、ガイドライン）は、全国保育士養成協議会に加盟する東北ブロックの指定保育士養成施設（以下、養成校）における保育実習指導の実態を調査し、その調査結果から実習教育の基本的な方針や指導内容の基本事項を明確にできた。平成25年に作成したガイドラインは調査をもとにその後も見直しを続けてきたが、「施設実習」に関する内容の検討は十分ではない状況であった。

施設実習に関する指導については先行研究を確認すると課題がいくつか見られる。たとえば矢野（2011）は「『保育』ということばかりから養成校側は保育所保育士養成に偏りやすい傾向にある」とし、「実習生の一般的な意識としても、（中略）『保育所で働きたい』などの保育士＝保育所で働く事という意識が非常に強い」<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 「保育」ということばかりから養成校側も保育所保育士に偏りやすい傾向にあることも指摘している。詳細は矢野陽子（2011）「保育士養成における施設実習の意義と事前指導に関する検討」,九州共立大学紀要48（1）,138を参照。

と指摘している。実習生のみならず教員も「施設実習」に対する意識が低い状態は施設実習に関する指導における質の低下に繋がりがかねない状態といえる。また、石山・阿部（2008）は「『施設実習』といっても（中略）その範囲は広く、施設養護の全般的な内容や実践技術・方法を学んでいく必要性が出てくる」<sup>2</sup>と述べており、実習受け入れ施設（以下、実習施設）の種別ごとに必要な情報や知識をどう効果的に伝達していくかが課題となっている。

このような課題から全国保育士養成協議会東北ブロックではガイドラインの「施設実習」に関する内容を充実させる必要があると考え、まず加盟する各養成校の「施設実習」に関する指導内容や課題を確認するために養成校の施設実習を担当する教員（以下、施設実習担当教員）に対して時本・瀬尾ら（2019）が実態調査を行った。その結果、保育実習Ⅰ（施設）においては施設の理解や子ども・利用者の理解を指導のポイントとして捉えるとともに、その指導の進め方に課題を抱えていることが明らかとなった。また、保育実習Ⅲでは自立支援計画の立案を指導のポイントとしながらも、保育実習Ⅰ（施設）を踏まえた段階的な実習の実施に課題を抱えていることが明らかとなった<sup>3</sup>。

ただ、この結果のみを基に施設実習に関する指導のあり方について検討しガイドラインに示すことは、その後に課題が生じる可能性がある。なぜなら、実習を受け入れる実習施設側が必ずしも養成校側と同様の考えを持っているとはいえないためである。赤瀬川・友川（2015）が行った施設実習先の実習指導を担当する職員（以下、施設実習担当職員）に対するアンケート調査によると、施設保育士に求められる知識や技術について、保育士養成課程で力を入れて教育を行っている内容にもかかわらず必要性が低いという結果を示している<sup>4</sup>。つまり、養成校側と実習施設側とで求めている施設保育士像に不一致が見られており、双方が必要と考

える実習や実習指導の内容に少なからず齟齬が生じている可能性が高いと考えられる。また、石山・阿部（2008）が「実習受け入れ側と積極的に関与しながら、養成機関に求められている実習指導とは一体何なのかを吟味し、お互いにとって意義のある実習のあり方について検討を行わなくてはならない」<sup>5</sup>と述べているように、実習施設側の意見や考え方を踏まえて指導のあり方を検討する必要がある。しかしながら、前述した先行研究にもあったように「施設実習」を行う実習施設の種別は多い。実習施設の種別が異なれば求める施設保育士像も異なり、実習や実習指導のあり方についても異なる考えを持っている可能性もある。松藤・中村（2016）による施設実習における実習施設種による学びの差異に関する研究によると「乳児院と児童養護施設における学びに関しては、ある程度共通性があると思われる。しかしながら他の施設種との比較において、どちらか1つの施設のみが他の施設との間に差が見られた結果が

<sup>2</sup> 石山貴章・阿部孝（2008）「保育士養成機関における『施設実習』の現状と課題（Ⅰ）- 短期大学『施設実習』に向けた事前指導を通して -」, 九州ルーテル学院大学紀要 visio38,158.

<sup>3</sup> 時本英知・瀬尾知子・三浦主博 他（2019）「保育（施設）実習の事前・事後指導の実際と課題～全国保育士養成協議会東北ブロック内における調査より～」, 社会福祉科学研究第8号, 69-82を参照。

<sup>4</sup> 保育士養成課程において多くの時間を費やしている子どもの成長・発達、環境構成、遊びに関する技術の必要性は他の項目に比べ低い。さらに、保護者支援、地域住民との関係形成、地域機関との連携に関しても低い結果を示している。詳細は赤瀬川修・友川礼（2015）「保育士養成校における施設実習指導の課題- 実習指導者が考える施設保育士に求められる資質に関するアンケート調査から -」, 松山東雲短期大学研究論集 45,11-19を参照。

<sup>5</sup> 現場の抱えている問題意識を捉え、実習指導に反映させるためにも現場との対話が重要であることを指摘している。詳細は石山貴章・阿部孝（2008）「保育士養成機関における『施設実習』の現状と課題（Ⅰ）- 短期大学『施設実習』に向けた事前指導を通して -」, 九州ルーテル学院大学紀要 visio38,157-170を参照。

いくつか見られていた」としている。施設実習を通じた実習生の学びに差が生まれているということは実習施設が考える実習に対するねらいが異なっていたり、そもそも育成したい施設保育士像が異なっていたりする可能性も十分に考えられる。

そこで本研究では、時本・瀬尾ら（2019）が先行研究として行った東北ブロック内の施設実習指導に関する実態調査<sup>7</sup>の結果において、施設実習先の種別として多くなっていた児童養護施設を調査の対象とし、施設実習担当職員に対してインタビュー調査を行う。調査を通して施設実習担当職員の考える児童養護施設の施設保育士として求められる要件、施設実習を行うにあたり実習生に必要と考える知識・技術・経験・態度、実習生の指導を行う際に特に重視していること、施設実習を実施するにあたり養成校や養成校教員に期待する役割や取り組みについての認識を明らかにする。その結果をもとに児童養護施設における施設実習を効果的に行うための保育実習指導のあり方について考察することを目的とする。

## II 方法

### 1. 調査対象

本研究では保育実習Ⅰ（施設）あるいは保育実習Ⅲを実施している児童養護施設を東北6県（青森、岩手、秋田、宮城、山形、福島）の各県から6施設選定し、各施設で施設実習の指導を担当している者を調査対象とした（表1）。対象となる児童養護施設の選定にあたっては数年にわたり施設実習を受け入れていること、養成校教員と施設実習担当職員が施設実習をはじ

<sup>6</sup> 松藤光生・中村恭子（2016）「施設実習における実習施設種による学びの差異」中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要第48号,65-71.

<sup>7</sup> 時本英知・瀬尾知子・三浦主博 他（2019）「保育（施設）実習の事前・事後指導の実際と課題～全国保育士養成協議会東北ブロック内における調査より～」, 社会福祉科学研究第8号,69-82を参照.

めとした保育士養成に関する意見交換や情報交換が行われていることを条件とした。この理由としては筆者らと施設実習を通して関係が築かれていることで、インタビュー調査において対象者の抱く考えや思いなどを踏まえた豊かな語りが得られやすいと考えたためである。また、保育士養成における養成校と保育現場との協働が指摘される現状において、意見交換と情報交換等を行っている実習施設が今後ますます一般的になると考えたためである。

表1 調査協力者の属性

	職種	実習指導歴
A	児童指導員	10年
B	保育士	23年
C	保育士	7年
D	児童指導員	9年
E	保育士	5年
F	保育士	5年

### 2. 調査方法

調査対象者への調査協力の依頼にあたり、事前に施設長に対して電話等にて調査協力に関する説明を行ったうえで、文章を送付し調査協力の依頼を行った。そのうえで承諾の得られたAからFの調査協力者6名に対し、任意の日程で調査協力者の施設へ筆者らが訪問し調査を実施した。調査は必要に応じて質問をなげかけながら回答に至る経緯や理由を詳細に聞き取る必要があると考え、半構造化インタビューを行った。なお、インタビュー調査は許可を得たうえでICレコーダーにて録音しながら進めた。

### 3. 調査時期

インタビュー調査は2017年8月から10月にかけて、調査担当者1名が訪問し施設内にて実施した。それぞれの調査時間は60分～150分程度であった。

#### 4. 調査内容

調査内容は①対象者自身の属性、②施設実習の受け入れに関する項目（4項目）、③施設の主体や理念に関する項目（7項目）、④実習生の態度に関する項目（1項目）、⑤保育士養成校ならびに教員に関する項目（1項目）、⑥施設養護のプロフェッショナルに関する項目（4項目）、⑦知識・技術・経験に関する項目（4項目）の全22項目である。ただし、自由な語りを通して可能な限り調査協力者の率直な考えを引き出すために、質問の意図が変化しないように注意しながら順番や質問の仕方については変更し進めた。また、必要に応じて回答に至る経緯や理由を詳しく聞き取るための質問を加えながら調査を行なった。

#### 5. 分析方法

録音した各インタビューの音声データは逐語録として文字化し、その文字化したデータを大谷が開発したSCAT (Steps for Coding and Theorization)<sup>8)</sup>を用いて分析を行った。分析の手順は次の通りである。まず、Microsoft Excelで作成したSCATのフォームに「番号」「発話者」「テキスト」を入力し、①テキストの中の着目すべき語句を記入する、②①の語句を言い換えるテキスト外の語句を記入する、③②を説明するための概念、語句、文字列を記入する、④テーマ・構成概念を記入するという4ステップのコーディングを行なった。そして、この4ステップコーディングで抽出した構成概念を紡ぎストーリーラインの作成し、その結果をもとに考察した。

#### 6. 倫理的配慮

事前に調査協力予定者に対し書面と口頭にて研究目的や調査協力内容、協力者の権利、個人情報保護等を説明し、後日研究協力の可否の連絡を受けることとした。調査協力の内諾の連絡を受けた際にインタビュー調査実施日時と実施

場所を決めた。インタビュー調査のために訪問した際には改めて研究目的や調査協力内容、協力者の権利、個人情報保護等の説明を行ってから調査協力者から同意書に署名してもらった上でインタビュー調査を実施した。なお、本研究は東北生活文化大学短期大学部の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

### Ⅲ 結果と考察

調査協力者6名のインタビューデータをSCATによる分析を行い、作成したストーリーラインを表2に示す。ストーリーラインは4つの内容に分割して示し、その内容は児童養護施設の施設保育士として求められる要件については“施設保育士に求められること”、施設実習を行うにあたり実習生に必要なと考える知識・技術・経験・態度については“実習生に求めること”、実習生の指導を行う際に特に重視していることについては“指導で意識していること”、施設実習を実施するにあたり養成校や養成校教員に期待する役割や取り組みについては“養成校に求めること”とした。また、ストーリーライン内における下線はSCATによる分析の④テーマ・構成概念で導き出した「ことば」である。また、ストーリーライン内における「  」はインタビュー内の発言を引用したものである。以下では、それぞれの内容ごとの分析結果を示しながら考察を述べていく。その際、SCATの④テーマ・構成概念で導き出した「ことば」については【  】内に示し、インタビュー内容の発言を引用したものは「  」内に示していく。

<sup>8)</sup> 大谷尚 (2007)「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 - 着手しやすく小規模データにも提供可能な理論化の手続き -」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育学) 第54巻第2号, 27 - 44.

<sup>9)</sup> 大谷尚 (2011)「SCAT : Steps for Coding and Theorization - 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法 -」感性工学 10 (3) 155 - 160.

表2 施設実習に関する認識についてのストーリーライン

	施設保育士に求められること	実習生に求めること	指導で意識していること	養成校に求めること
A	施設保育士に必要な資質としては他者を受け入れる力やポジティブな省察ができるといった養育者としての人間性が求められる。また子どもに対して継続的な支援者として存在し続けることが何より重要であり、それが子どもの安心・安定に繋がると考えている。	施設実習は施設保育士の姿や専門性を学ぶ実習として位置付け、実習生には施設保育士をモデルとする学びを求めている。そのため、実習生は職員と利用者とのコミュニケーションを大切に、人間関係を構築する力が必要だと考えている。	実習中は現場での学びを重視し、実習生が養成校での学びを実習で体験・経験しながら確認できるようにしている。	実習前は先輩からの情報などを通して施設実習のイメージを持つ事前指導を行い、実習後は実習での学びを養成校で確認できるような指導を期待している。
B	家庭代替機能としての施設としては子どもが家庭的な体験ができる場づくりと子どもが受け入れられる雰囲気づくりが重要で、施設保育士は家族の一員のように振る舞う力が求められる。また、施設養護の場合は集団生活であるため、集団援助技術は必要であると考えている。ただ、そのなかでも子ども達の発達過程の知識をもとに個別化を図り、個々の違いを捉えた支援を行う力が求められると考えている。	実習生は家庭代替機能としての施設であることを意識し、基本的な生活習慣や生活力を身につけ、子どものモデルとなることを求めている。子どもとかわるうでで自らが経験した親子関係や家庭についての整理ができているとその手がかかりとなる。また、様々な子どもとかわる経験しておくことは、多様な子どもの存在理解や子どもの行動の意図理解が進み、アンビバレンスな子どもの行動の理解にも繋がる。そのため発達過程の知識、発達障害の知識は必要だと考えている。	施設保育士は子どものモデルであることを自覚し自己研鑽する必要がある、そこには実習生も含んだチームワークが重要となる。目指す所は同じであるため職員同士だけではなく職員と実習生間で相互に学ぶ姿勢を意識している。	養成校には「施設実習のポイントを具体的に」実習生へ説明し、施設実習のイメージを持つ事前指導を行うとともに、訪問指導の際には養成校教員が施設と実習生の仲介役となってくれることを期待している。
C	施設保育士は成育歴を踏まえたより深い子ども理解とかかわりが求められる。児童養護施設は「子どもからの試行動向がある現場」であることから踏まえて施設保育士には精神的な強さ、心身の健康が求められる。そのため、自分の生活を大切にすることも重要と考えている。それがあるからこそ子どもの将来を見通したかわりを大切にしたいと考えている。	実習生には広い視野を持ちどの子どもにも前向きにかかわる意識、気持ちが必要と考えている。そのためにも自分から発信しようとする意欲と態度で取り組むことを期待している。また、施設は子どもの生活の場であることを踏まえ、実習生の日常生活における自立を通して基本的な生活習慣が獲得できていることを求めている。また、児童養護施設の現状から実習生には発達障害の知識や養育障害の知識を求めている。	「職員個人の感覚」で指導すると、職員によって言うことが異なり実習生の「混乱」や「困り感」に繋がってしまう。そのため職員間の共通理解に基づいた貫性のある指導を意識している。	養成校には、施設の思いを踏まえた指導や事前指導における施設実習の意義の指導を通して、実習生の意欲と態度の向上に繋げてほしい。また、訪問指導の意義は実習生がほっとして落ち着く場、困ったことを話せる場であるためその状況を作ってもらいたい。
D	施設保育士には「基本的な子どもの発達や発達課題」などの子どもの発達過程の知識が必要不可欠であり、それが子ども理解の実際大きく影響を及ぼすと考えている。また、保護者に代わって養育にあたる施設保育士の生活力についても子どもに及ぼす影響は大きく、生活者としての経験が鍵になると考えている。	実習生とはいえ子どもたちにとって「人生の途中でかわった人」ということになるため、誠実な実習生を理想像としている。また、子どもを尊重するという視点から子どもを優先した行動を求めている。	実習生の指導にあたっては実習生が子どもたちの「できない」ことにフォーカスを当ててしまうことを避けるために、「できること」を探して実習生のストレングスを焦点化し指導と評価をするように心がけている。	現場経験のある教員でも施設に対する先入観やその後の状況がアップデートされていない認識がある。混迷する現場と現場尊重を考えると教員は現状理解に努めてもらい、それを実習生に伝えてもらいたい。
E	施設保育士が対応する子どもたちは私たちが「一生かけても知り得ない経験」をしてきている。そのため、要保護児童に関する知識や子どもの行動理解のための知識に基づいた個別化に対応する養育技術が求められる。そのうえで児童養護施設として包括的・統合的支援の確立がなされていくと考えている。	実習生には実習を通してそれぞれの子どもの状況を捉え要保護児童の理解に繋がれるように発達過程の知識を身につけてくることを望んでいる。また、施設養護では子どもの将来を見据えたかわりを重視しているため、実習生が子どもに影響を与えることの自覚を持って実習に臨んで欲しいと考えている。	実習中は実習生にかかわりを通して子どもを捉えることと、施設保育士が行う支援の意図理解を重視しながら指導を進めている。そこから将来、実習生がメタ認知による振り返りを行えるようになったり、利用者主体の支援の実施に繋がると考えている。	養成校は施設が利用者主体の場であることを再認識し、その上で実習生に十分に伝え、実習生の基本的な生活力の確立を行ってから実習に臨ませてもらいたいと考えている。それが子どもの権利擁護を踏まえた養護にも繋がる。
F	施設保育士は子どもたちの生活支援等を通して生理的欲求や安全欲求を充足させ、また、人間関係や相談援助などを通して所属・愛の欲求や承認欲求を充足させることが求められている。そのうえで子ども達の将来を見据え様々な一般養護の中心課題に対応しながら自立生活支援を行う必要がある。	実習生には生活者である子どもの主体性と権利について理解してもらい、利用者中心主義のもと子どもと交流してもらいたい。また、基本的な生活習慣を大切にして生活力の向上に努めてほしい。さらに実習生にはボランティアや研修インターンシップ制を通して「社会経験を積みながら自立生活支援への展望を持つよう」にしてもらいたい。	自身が過去に「児童養護施設に影のある印象を持っていた」という経験から、実習を通して施設実習のもつイメージ改善に繋がれるように、「実習生の得意なこと、やりたいこと」を通して、「長所を伸ばせる」ように意識しながら指導するよう心がけている。	養成校教員に対しては現場経験や交流を通して児童養護施設の現状を理解してもらいたい。そのうえで親密性に基づく関係を通して協力しながら実習生を指導することを期待している。

## 1. 施設保育士に求められることについて

児童養護施設は子どもが【家庭的な体験ができる場】であり、そこには子どもが【受け入れられる雰囲気】が必要不可欠である。そのような場を中心となつてつくる施設保育士は【家族の一員】としてさまざまな状況の子どもを迎えることになるため、【他者を受け入れる力】が求められる。さらに生活における大人の行動が子どもに与える影響の大きさを考えると施設保育士には一定以上の【生活力】が求められる。この【生活力】は日常生活のなかで培われる部分が大きいため、施設保育士の【生活者としての経験が鍵】となる。

また、児童養護施設には様々な背景を持つ子どもたちが入所しており【子どもからの試し行動などがある現場】である。そのことを踏まえると施設保育士には【精神的な強さ】や【心身の健康】は欠かせない。これらを持っていることで子どもたちが向ける行動に込められた思いに気づき、受け止めていくことが可能となる。

【生活力】や【精神的な強さ】、【心身の健康】については施設保育士にとってベースとなるものであり、【継続的な支援者として存在】し続け子どもの【安心・安定】に繋げていくために施設保育士にとって求められる重要な要素と捉えている。

施設保育士は以上のような要素をベースに【子どもの発達過程の知識】や【要保護児童に関する知識】、【子どもの行動理解のための知識】を備える必要がある。なぜなら子どもたちのなかには施設保育士が「一生かけても知り得ない経験」をしている子どもが含まれているため、それらの知識に基づきながら子どもの【個別化】を図り、【個々の違いを捉えた支援】や【成育歴を踏まえたより深い子ども理解とかかわり】を進める必要がある。このような施設保育士に求められる【個別化に対応する養護技術】は、個々の状況によって異なる子どもの【生理的欲求】【安全欲求】【所属・愛の欲

求】【承認欲求】を充足させるためには欠かせない養護技術といえよう。

現在の社会的養護の方向性としては可能な限り家庭に近い環境での生活を保障するために家庭養護や家庭的養護が推進されている。特に児童養護施設では“施設の小規模化”と“施設機能の地域分散化”が進められており、その取り組みを通してさらに子どもの【個別化】が図られている。そういった社会的養護の現状も影響し、施設保育士に求める要件として【個別化】に繋がる養護技術を特に重視していると考えられる。

## 2. 実習生に求めることについて

児童養護施設は【子どもの生活の場】であることを踏まえると、実習生とはいえ入所する“子どもの最善の利益を保障する”という観点を忘れてはならない。【実習生が子どもに影響を与えることの自覚】を持ち、一人の人間として【子どものモデルとなる】ことが実習生に期待される。そのためにも実習生には【基本的な生活習慣】の獲得と【生活力】の向上に努めてから施設実習に臨むことが求められる。さらに、施設実習担当職員は施設実習を【施設保育士の姿や専門性を学ぶ実習】と位置付けていることもあり、実習生には【施設保育士をモデルとする】学びを求めている。つまり施設実習では実習生に【子どものモデルとなる】ことを意識させながら【施設保育士をモデルとする】学びを展開するため、実習生には【職員と利用者とのコミュニケーション】がしっかり取れる【人間関係】を構築する力が求められる。

また、実習生は様々な【子どもと交流】しながら【要保護児童の理解】に繋げていくことを期待している。そのため実習生は【どの子どもにも前向きにかかわる意識、気持ち】を持ち、子どもからの行動を待つだけでなく【自分から発信しようとする意欲と態度】を持って実習に取り組むことを求めている。さらに実習中は

【子どもの主体性と権利】に基づく【利用者中心主義】と【子どもを尊重】するという意識をしっかりと持ちながら子どもを優先した行動が実習生に求められる。この行動による子どもとのかかわりは子どもに安心感や信頼感をもたらす可能性が高まり、【アンビバレンスな子どもの行動】を引き出すことにも繋がる。実習生が【アンビバレンスな子どもの行動】に直面し考えることで【子どもの行動の意図理解】のきっかけとなり、【多様な子どもの存在理解】に結びついていくと考えられる。ただし、そういった施設実習での経験を効果的な学びに繋げるためにも実習生は保育所保育士にも施設保育士にも共通して【発達過程の知識】を基本としながら、【愛着障害の知識】や【発達障害の知識】などを持っておくことが必要となってくる。

以上のように“子どもの最善の利益を保障する”という観点に立ち、実習生には専門的な養護技術よりもまずは学習者としての意識と子どもの理解に繋げるための基礎知識の獲得を望んでおり、その上で意欲的な態度を持って実習に取り組んでいくことを求めていることが窺える。

### 3. 指導で意識していることについて

実習生を指導するにあたりチームワークが意識されており、このチームワークには職員同士のチームワークと実習生を含んだチームワークがある。まず、職員同士のチームワークを意識する理由としては実習生を指導するにあたって職員間の【共通理解に基づく一貫性のある指導】を行うためである。児童養護施設では勤務形態等により実習期間を通して同じ施設保育士による指導が続けることが難しい状況が見られ、複数の施設保育士によって指導に当たることが多い。そういった状況において指導内容が統一されないまま「職員個人の感覚」で指導を進めてしまうと実習生の「混乱」や「困り感」が発生する要因となる。次に実習生を含んだチームワークを意識する理由としては、実習を通し

て職員同士だけではなく【職員と実習生間で相互に学ぶ姿勢】を示すことで、施設保育士として【子どものモデルであることを自覚し自己研鑽する】大切さの理解に繋げるためである。

その他、実習生を指導するにあたり意識していることとして【実習生のストレングスを焦点化し指導と評価】をすることが挙げられている。これは、実習生が子どもに対して向ける視点を考慮しているためである。児童養護施設で暮らす子どもはこれまでの家庭での生活状況等により「できないこと」を持ち合わせていることが多い。ただ、子どもの「できないことにフォーカス」を当てて支援することは、子どもの自己否定感を増大させてしまうことに繋がりがかねない。そのため、施設保育士は子ども「できないことにフォーカス」するよりも「できること」を探し、「長所を伸ばせる」ように意識しながら苦手なことも同時に引き上げていく支援が求められる。このような支援の大切さを理解するためにも、実習では【実習生のストレングスを焦点化し指導と評価】を意識し進めている。実習生が「できること」にフォーカスされる経験を積みながら、その支援の重要性についての理解に繋げて欲しいと考えていることが窺える。

### 4. 養成校に求めることについて

児童養護施設は実習生を指導する場である前に、社会的養護を必要とする子どもの生活と権利を保障する場である。そのため、養成校に対しては児童養護施設が【利用者主体】の施設であるということの再認識と理解を求めている。そして、施設実習担当教員を中心に【現場経験や交流】を通して児童養護施設の現状を理解し、施設実習担当教員と施設実習担当職員との【親密性】に基づく関係を通して【協力しながら実習生を指導】することを期待している。また、たとえ現場経験のある施設実習担当教員であったとしても【施設に対する先入観】や退職してから【アップデートされていない認識】が



見られるため、児童養護施設の現状理解に努めてもらいそれに基づきながら実習生の指導にあたって欲しいと考えている。この考えの根底には事前指導において「施設実習のポイントを具体的に」実習生へ伝えられ【施設実習のイメージを持てる事前指導】の実施を求めている点にある。さらに、事前指導では【施設の思いを踏まえ】ながら【施設実習の意義の指導】を行い、実習生の施設実習に対する意欲と態度の向上に繋げて欲しいと考えている。

その他、施設実習中の訪問指導において養成校の教員には、実習生にとって【ほっとして落ち着く場】となり【困ったことを話せる場】となれるような状況を作り出してもらいたいと考えている。そしてその関係を通し、例えば実習生が施設実習担当職員へ直接伝えづらい施設実習における不安や悩みを養成校教員が確認し、それらを解消したり施設実習担当職員と共有したりする【施設と実習生の仲介役】となり、施設実習が効果的かつ円滑に進められるような役割を担うことを養成校に求めている。また、実習後においては【実習での学びを養成校で確認】し、実習生が自ら行った実習をふりかえりながら学修する指導が行われることを期待している。

#### IV 考察

本研究は、児童養護施設において施設実習を担当する職員6名に対しインタビュー調査を行った。この調査を通して施設実習担当職員が考える「児童養護施設の施設保育士として求められる要件について」、「施設実習を行うにあたり実習生に必要と考える知識・技術・経験・態度について」、「実習生の指導を行う際に特に重視していることについて」、「施設実習を実施するにあたり養成校や養成校教員に期待する役割や取り組みについて」の認識を明らかにした。その結果から得られた児童養護施設において効果的な実習を行うための保育実習指導に

関する知見は以下の通りである。

#### 1. 生活力の必要性に対する認識について

施設実習担当職員の認識において施設保育士の基盤として【生活力】を求めており、それを実習生に対しても求めている。これまでも養成校においては実習生が【生活力】を獲得する必要性について認識されてきた。しかし、その意義や目的について実習施設側と養成校側の認識とでは重視しているポイントにズレが生じている可能性がある。例えば矢野(2011)は「かなり細かい内容(例:掃除の方法・挨拶の方法・欠席などの病気の連絡など)を指導しなければ以前には見られなかったような『非常識』な出来事が起こることもある。実習は社会人としてのマナーを学ぶ場でもあり…」<sup>10</sup>と述べている。このような養成校側の認識は「実習施設に対し失礼のないようにし、より良い指導を受けられる体制を整えるために」や「実習生の将来のために」という思いが強いように感じられる。一方で実習施設側は施設保育士が【生活力】を高め、【子どものモデルとなる】ことにより、児童養護施設で暮らす子どもの成長に繋げていくという認識の方が強く感じられる。赤瀬川・友川(2015)は「生活援助を行うためには、その前提として支援者が日常生活の自立ができてることが当然求められる」<sup>11</sup>と指摘している。つまり、実習生が【生活力】を身につけることは、施設実習を通して施設保育士とし

<sup>10</sup> 実習指導の在り方として、基本的なルールを理解してもらうことから指導を行わなければならない学生が年々増加していることを指摘しており、実習が社会人としてのマナーを学ぶ場でもあると述べている。詳細は矢野陽子(2011)「保育士養成における施設実習の意義と事前指導に関する検討」、九州共立大学紀要48(1),129-138を参照。

<sup>11</sup> 保育士は子どもの生活力を育むことを意識した子どもへのかかわりが求められるが、実習以外にそれを学べる機会が少ないことを指摘している。詳細は赤瀬川修・友川礼(2015)「保育士養成校における施設実習指導の課題-実習指導者が考える施設保育士に求められる資質に関するアンケート調査から-」、松山東雲短期大学研究論集45,11-19を参照。

での専門的な学びを進めるという実習目的のために必要な要素なのである。

同じ【生活力】を高めることには違いないが、施設実習担当教員は施設実習を【施設保育士の姿や専門性を学ぶ】場であるという認識に立ち返り、【生活力】を求める指導を実習生の生活指導という考え方を見直す必要がある。そのためにも、実習生には実習指導を通して児童養護施設は【子どもの生活の場】であることをしっかりと認識させ、【実習生が子どもに影響を与えることの自覚】と実習生が【子どものモデルとなる】ことの自覚を明確に持たせようとして、生活力を高める意図を伝えながら指導することが必要であろう。

## 2. コミュニケーション力の構築について

児童養護施設の施設保育士は保育所保育士と比べて、そのイメージや業務内容を実習生が持つことは容易ではない。そういった実習生の状況において施設実習は児童養護施設の【施設保育士をモデルとする】学びが展開されることが多い。実習生は施設保育士の業務を実際に見て確認し、その内容を施設保育士に確認しながら具体的な業務内容を理解しイメージを構築していくことになる。例えば、実習生が見た支援や子どもの状況を自分で施設実習担当職員に説明しながらどのように把握したのかを確認する。それに対して施設実習担当職員は実習生が把握した内容に訂正や修正を加えながら説明していく。そういった実習生と施設実習担当職員とのやりとりを繰り返しながらより適切な支援の意図理解や子どもの行動理解へと繋げていくのである。このような一連の学びを成立させていくには実習生のコミュニケーション力は欠かすことができない。

また、【要保護児童の理解】に繋げていくためにも実習生は【子どもと交流】することは欠かせない。その交流を進める際も実習生のコミュニケーション力が求められ、ここでは子

もとの会話を通したコミュニケーションだけではなく、子どもの行動を読み取りながら行動等で返していくといったノンバーバルコミュニケーションも含まれてくる。そういったコミュニケーション力を活用しながら、子どもの信頼を高め子どもの本当の姿を引き出し、その姿を通して保育や支援のあり方を検討することが実習生に求められる。

実習生が施設実習を通して上記のような学びを得るためにも、実習指導においてコミュニケーション力を高められるような学習が必要となる。赤瀬川・友川（2015）は保育士としての基本的スキルの一つとしての「コミュニケーション能力を高めるためには実習やボランティア等を通して子どもとかかわりを持つ経験を重ね、それを丁寧にフィードバックすることが重要」<sup>12</sup>と述べている。昨今の保育士養成においては多様な学習方法が取り入れられており、学生同士の対話などを通じた学びの機会が増えている。しかし、施設実習の現場のように年齢や立場の異なる者とかかわる機会は決して多くはない。そういった点を考えると実習生のコミュニケーション力の向上を図る学びとして、立場の異なる者とかかわる場を設ける必要がある。また、ただ経験させるだけではなく、子どもの行動をどう読み取り、どう返す必要があるのかといった検討やフィードバックの機会を設定する必要があるといえよう。

## 3. 施設実習の意義や目的的理解について

施設実習担当職員は【施設実習のイメージを持つ事前指導】や【施設実習の意義の指導】の充実を図り、実習生の実習に対する意欲の向上を求めている。また、この指導の充実にあ

<sup>12</sup> 保育士としてどのような視点に基づき子ども観察すべきかの指導も必要と述べている。詳細は赤瀬川修・友川礼（2015）「保育士養成校における施設実習指導の課題－実習指導者が考える施設保育士に求められる資質に関するアンケート調査から－」、松山東雲短期大学研究論集 45,11-19を参照。

り施設実習担当教員等の【施設に対する先入観】や【アップデートされていない認識】の改善を求めている。大江・伊勢ら（2005）は「保育所以外の施設での実習は実際のイメージがわきにくいいため、強い不安が生じたり、動機づけが難しくなりがちである」<sup>13</sup>と実習生の状況における課題を指摘している。その一方で、村田（2016）が行った施設実習担当教員に対する調査において「保育士の専門性と施設職員の専門性の不明確さ、保育士養成カリキュラムとの齟齬、脱施設化の方向性など、実習の目指すところが不明確・不透明な中で指導には閉塞感や矛盾がつかまとう」<sup>14</sup>という施設実習担当教員の課題についても指摘している。

このような施設実習に関する課題については以前から指摘されており、実習施設においても把握されている。さらに言及すれば、施設実習担当教員等の【施設に対する先入観】や【アップデートされていない認識】の改善を求めているのは、施設実習担当教員と施設実習担当職員とのコミュニケーションを前提とした往還性に課題があると考えられる。また、【施設実習のイメージを持てる事前指導】や【施設実習の意義の指導】の充実を図り、実習生の実習に対する意欲の向上を求めていることは、施設実習担当教員と実習生との事前事後はもちろん実習中の学習の往還性に課題が生じている。さらに、【親密性】に基づく関係を構築し【協力しながら実習生を指導】することへの期待は、実習生と施設実習担当職員とのコミュニケーションを前提とした往還性が大きな課題であることの指摘とも読み替えられるのではないかと。だからこそ、施設実習担当職員は施設実習担当教員等と

の【親密性】に基づく関係を構築し【協力しながら実習生を指導】することを期待しているのである。その方法は様々な形が考えられるが、直接あるいは間接的に児童養護施設や社会的養護の具体的な現状が伝えられたり、実習施設側の支援や実習に対する思いが伝えられたりすることで、実習生の施設実習に対するイメージも構築しやすくなると考えられる。また、実習生だけでなく施設実習担当教員もまた児童養護施設の現状や考えを把握し、それらを含んだ実習指導の実施へと繋がっていく。

強いプレッシャーや負担のかかる実習を進めるにあたり、実習生が施設実習の意義や目的を明確にできていなければ実習における専門的な学習効果は期待できない。養成校としては実習施設側に協力を求めるにあたって、主に専門的な内容に限ってしまいがちである。しかし、基礎的な部分といえる施設実習の意義や目的の明確化と実習生への伝達が施設実習担当教員の専門等によって難しいのであれば、実習施設と協力しながら作り上げ、協力しながら伝えていく方法を模索することが必要であろう。

#### 4. 総括と今後の課題

本研究では施設実習担当職員の施設保育士の認識や実習生に求める考え、養成校に期待することについて明らかとなった。その意見や考え方を踏まえながら児童養護施設における実習に向けた指導や実習後の指導のあり方を検討し、一定の内容を提案することができた。また、実習施設職員－実習生－養成校教員の往還性についての重要性が浮かび上がった。ただし、施設実習の現状における数例の施設実習担当職員の認識や考えであるため、施設保育士としての専門性を高めるための指導という視点に立つと、これだけでは決して十分とはいえない。今後、施設実習の内容が底上げされていった際に改めて実習施設側の認識や考えを整理した上で、指導内容を検討する必要性があろう。

<sup>12</sup> 大江啓賢・伊勢正明・林典子・小林巖（2005）「実習指導における専門職養成校と実習施設の連携に関する一考察-社会福祉士、保育士の施設実習を中心に」東京学芸大学実践研究支援センター紀要第1集.159.

<sup>13</sup> 村田恵子（2016）「保育士養成課程における施設実習指導の現状と課題-施設及び養成校実習指導担当者への調査から-」就実教育実践研究第9集.76.

## 参考文献

- ・赤瀬川修・友川礼（2015）「保育士養成校における施設実習指導の課題－実習指導者が考える施設保育士に求められる資質に関するアンケート調査から－」,松山東雲短期大学研究論集45,11-19.
- ・大江啓賢・伊勢正明・林典子・小林巖（2005）「実習指導における専門職養成校と実習施設の連携に関する一考察－社会福祉士、保育士の施設実習を中心に」東京学芸大学実践研究支援センター紀要第1集,159.
- ・原口喜充・大谷多加志（2018）「保育者からみた心理専門職との協働－経験による変化と関係性に着目して－」,保育学研究56(3),126-136.
- ・村田恵子（2016）「保育士養成過程における施設実習指導の現状と課題－施設及び養成校実習指導担当者への調査から－」就実教育実践研究第9集,69-77.
- ・村田恵子（2017）「施設実習で保育学生に期待される学びに関する研究－施設ベテラン職員、保育士養成校実習担当教員への調査から－」就実教育実践研究第10集,73-89.

## 付 記

本研究は、一般社団法人全国保育士養成協議会より平成29年度ブロック研究助成、全国保育士養成協議会東北ブロックより平成29年度－30年度共同研究助成を受け実施したものの一部である。また、本論文は日本保育学会第71回大会（平成30年5月13日,宮城学院女子大学）にて発表したものを加筆、修正したものであることを附す。

**Nursery training guidance for effective institutional training in orphanages :**  
**Focusing on the awareness of facility training staff on facility nursery and**  
**facility training**

**Abstract**

The purpose of this study is to clarify the perceptions of the staff in charge of facility training in orphanages regarding “what is required to facility nursery teachers” “what is required to apprentices” “what is conscious of guidance” and “what is required for the training school” and consider how childcare training guidance should be given to effectively conduct facility training. Therefore, an interview survey was conducted with the staff of the orphanage in charge of the institutional training and the analysis by SCAT were performed. As a result, in childcare practical training guidance, ① to teach with communicating the importance of enhancing living ability to become a child's model, ② to train with feedback while communicating with people in different positions and considering the content and response to the action, ③ to guide with clarifying the meaning and purpose of facility training in cooperation with the training facility are suggested as the important items.

Key Words : facility training, orphanage, Nursery training guidance, SCAT